

学位研究第16号 平成14年3月 (研究ノート・資料)

[大学評価・学位授与機構 研究紀要]

米国における専門職学位プログラム
—教育系プロフェッショナルスクールのEd. D.—

Professional Degree Programs in the U.S.:
Ed.D. program of the professional school of education

橋本 鉦市

HASHIMOTO Koichi

Research in Academic Degrees, No.16 (March,2002) [the essay/material]

The Journal on Academic Degrees of National Institution for Academic Degrees

1. はじめに	95
2. UCLAの教育系プロフェッショナルスクール	95
3. 教育リーダーシッププログラムの内容	97
(1) 職業学位プログラムとしての特徴	97
(2) 理念と方針	98
(3) 教育方法と内容	99
(4) 学位取得までのステップ	100
4. おわりに	102
ABSTRACT	104

米国における専門職学位プログラム

—教育系プロフェッショナルスクールのEd. D.—

橋本 鉦市*

1. はじめに

「学位」とは、教育課程に着目した場合（プログラム・ベース）、その修了証書に他ならないが、同時に職業的レリバンスの文脈からすれば、ある職業への参入資格書という機能も併せ持っている。博士レベルの学位に関しては、米国のPh. D.がよく知られているが、これはDoctor of Philosophyという名称が示すように、文理系大学院（Graduate School）で授与される基礎研究部門での研究学位（research degree）であり、職業的なレリバンスから言えば、大学教員・研究者のマーケットでの一種の資格証明書となっている。したがって、学位の持つ教育プログラムの修了書とそれと密接に関連した職業分野への参入証という冒頭の定義から逸れているわけではないが、留意したいのは博士レベルの学位が、このPh. D.という研究学位だけではなく、むしろその他に特定の職業分野と結びついた学位も数多く授与されている点であり、本稿で取り上げる教育の分野におけるEd. D.（Doctor of Education）はその好例である。

Ed. D.は、文理系大学院ではなく、教育系のいわゆるプロフェッショナルスクールで授与されている教育分野での職業学位であり、後述するように3年ほどの職業志向的なプログラムの修了とともに授与され、教育界では昇進や転身にきわめて大きな意義を持っている。なお、医学（M.D.）や法学（J.D.）なども、学士取得後3～4年間にわたるメディカルスクールまたはロースクールで授与されるものであり、プロフェッショナルスクールで提供される教育プログラムの修了という学位要件という点では、Ed. D.と同じではあるが、これらの分野の学位は中世大学以来の伝統的な専門職学位であり、またその学位が特定の専門職参入の資格として位置付けられているという点から、「第一専門職学位」として括られている。

さて、Ed. D.は教育分野における実践的な活動や調査研究と密接に関連した博士学位であり、その意味でPh. D.などとは性格を異にしているが、わが国では、特に文科系などでは、基礎的な研究志向と碩学の業績証明という学位観が根強く、こうした学位プログラムはあまりなじみがないと言える。そこで、本稿では、UCLAの教育学プロフェッショナルスクールにおけるEd. D.プログラム（「教育リーダーシッププログラム」：Educational Leadership Program）を事例として、その概要について紹介を試みる。

2. UCLAの教育系プロフェッショナルスクール

カリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）には、教育系プロフェッショナルスクール

* 大学評価・学位授与機構 学位審査研究部 助教授

として、Graduate School of Education and Information Studies（以下、GSE&ISと略記）が設置されている。組織的には、教育学系と図書館情報学系とに大別されるが、これは州政府からの大学予算が削減された折りに、図書館情報系の学系（Department Library and Information Science）がGraduate School of Educationに統合された結果である。したがって、このプロフェッショナルスクールは、以下のような学位プログラムが提供されている。すなわち、「情報科学」（Information Studies）、「都市学校教育」（Urban Schooling: Curriculum, Teaching, Leadership & Policy Studies）、「学生カウンセリング」（Counseling in Student Affairs）、「教育リーダーシッププログラム」（Educational Leadership Program）、「高等教育・組織変革論」（Higher Education and Organizational Change）、「初中等校長リーダーシッププログラム」（Principal's Leadership Institute）、「教育心理学」（Psychological Studies in Education）、「社会調査法」（Social Research Methodology）、「社会科学・比較教育学」（Social Sciences & Comparative Education）、「教師教育プログラム」（Teacher Education Program）などである。

上記のプログラムのうち情報科学を除いた教育学関係のプログラムでは、研究学位として、「都市学校教育」ではリーダーシップ、政策研究、教育・カリキュラム研究の3分野でPh. D.を、「高等教育・組織変革論」では高等教育と組織変革のM. A.とPh. D.を、「教育心理学」では学習心理学でM. A.を、教育心理学でPh. D.を、「社会調査法」では量的調査法でM. A.とPh. D.を、また教育研究法でM. A.とPh. D.を、「社会科学・比較教育学」では、比較教育学、エスニック研究、カルチュラル・スタディー、哲学・歴史研究の4分野でM. A.とPh. D.を、それぞれ授与している。

また一方で、職業学位としては、「教育リーダーシッププログラム」でEd. D.を、「学生カウンセリング」、「初中等校長リーダーシッププログラム」、「教師教育プログラム」でそれぞれM. Ed.を授与している。

以上のように、Ph. D.とM. A.は研究学位、またEd. D.とM. Edは職業学位と大別できるわけだが、カルフォルニア州では中等教員の資格に修士以上の学位が要件とされており、教員養成の各種プログラムとそれが授与するM. Ed.は、中等学校の教員を目指す学生のニーズにも応えている。米国ではEd. D.のみを授与する、あるいはそれが主体である教育学系のプロフェッショナルスクールも存在するが、UCLAのGSE&ISの場合、Ph. D.プログラムなど教育系の研究者養成、中等教員の養成、さらに以下で詳しく考察するEd. D.プログラムの教育関連の実務者養成、という3つの役割を担っていると言えるだろう。

ただし、UCLAのGSE&ISが、1939年の創設から常にこうした多様な学位プログラムを提供してきたわけではないし、時代ごとに重点的、あるいは戦略的に開設されたプログラムも少なくない。たとえば、本稿で取り上げるEd. D.を授与する教育リーダーシッププログラムは、1993年にGSE&ISに、半ば独立したプログラムとして開設されたが、1990年代初頭の全国的な経済不況から大学予算が削減され、それに伴って外部資金への依存が図られたことが一番大きな要因となっている。GSE&ISも、自らその本質的な役割である教育専門職の養成・輩出という機能を改めて自覚し、またそれを戦略的に高める必要性が生じたのであり、またそうした方

向で独自に学生からの授業料徴収といった予算確保を図ることとなったのである。

つまり、GSE&ISは大学内外での生き残りのために、中等教員と研究者だけではなく、より実践的な教育関連の専門職の養成にも、その機能と役割の幅を広げてきたわけであり、また研究大学であるUCLAの一部門とは言っても、そうした実務的な志向をもつ学位プログラムとの間に重点が移行しつつあるとも言えるだろう。

3. 教育リーダーシッププログラムの内容

さて、それでは1993年にGSE&ISに開設された教育リーダーシッププログラムとは、どのような実践的な教育内容とカリキュラムを有し、そこに入学する学生はどのようなバックグラウンドをもち、またさらにどのようなプロセスを経て卒業＝学位取得に到達しているのだろうか。以下では、この学位プログラムの特徴、教育理念、カリキュラムの実際、学位取得までのステップ、などについて紹介してみたい。

(1) 職業学位プログラムとしての特徴

すでに前述したとおり、研究職用の学位という性格が濃くまた理論的志向を持つPh.D.と比べ、Ed. D.はより実践的な教育領域での専門職学位として位置づけられている。したがって、Ed. D.が取得できるこのプログラムでは、情報科学、学校経営、文化人類学、社会学、心理学、都市計画、などの分野でのより実践的な方法論の修得と、それによるアクションリサーチが目指されている。

具体的には、コースワークは、学生に幅広い視野に立って思考することを教えるために学際的でプロセス志向のカリキュラムが目指されており、リーダーシップが最も効率よく涵養されるよう、各クラスにおけるプロジェクトを学生と教授陣とが協力的で、またかつプラクティカルな形で推進されるように配慮されている。また、学生・教授陣の実践的な教育現場での経験は、大きな重要性を持つものとして、クラスでの議論に組み込まれており、そこでは活発な議論とともに、「書く」というスキルの向上も重視されている。

したがって、このプログラムでは教育の現場での実践とそのスキルを向上させることが第一義とされているのであり、他の学生と十分なコミュニケーションと協力が必要となるプロジェクト課題に取り組むことを通して、学生個人個人が自らの実践的なスキルを磨くこと、また机上の概念と理論を経験的または予測される教育現場の諸問題に適用できるようなスキルを身につけることが最大の目的とされている。そうしたスキルによって、教育現場でのリーダーシップが発揮できると考えられているのである。プログラムは3年にわたっているが、まず1年次では、アクションリサーチなど調査・分析手法の修得、組織におけるリーダーシップに関する基礎教育、学校経営・教育実践の法制的側面の学習、学校教育の制度的構造や文化的な風土についての考察、先端的なテクノロジーとそれを利用した学修方法の熟達、などが主な学習内容となっている。2学年目には、初中等から高等教育レベルに至るまでの生徒・学生の成長・発

達に関する学習と評価方法、アクションリサーチの分析手法と統計的データの取り扱いかた、ケーススタディと質的な調査の手法と分析、また最終学期には筆記試験と第3学年でのプロジェクト課題のために実際にフィールドでの経験が課せられることとなる。第3学年では、主に自らが選んだプロジェクト課題を仕上げることに重点が置かれるが、同時に、その実地経験の中でリーダーシップの涵養をはかることが期待されている。

なお、各年度の学生の数は22～27名とかなり限られてはいるが、93年度の開設から2000年度までの卒業生総数は82名、そのうち初中等段階の学校関係者は50～70%、また大学関係者は25～40%、さらに教育一般に関連する職に就いているものは5～15%という内訳になっている。したがって、ほぼ全ての学生・卒業生が教育の領域に携わっていると言うことになる。

学位取得までに必要なコースワークの期間は、先述のように3年間ではあるが、実際には3年半ないし4年近く要している。ただし、このプログラムは、UCLAのGSE&ISが独自に提供するものであるため、単位制度（クレジット・ベース）にはなっておらず、したがって、単位を他大学の大学院レベルのコースに移転することはできない。この点でも、このプログラムが、教育関連の分野に直結した3年間の一種のパッケージとなっており、その特徴となっている。ちなみに、1年間の授業料は、およそ\$12,000となっている。

このプログラムの年間スケジュールとしては、週の平日のうちいずれか一晚、午後6時から10時までの授業と、1月に1～3回、土曜日午前から午後まで全日の授業というコースワークとなっている。まず入学した1学年目では9月から翌年の7月中旬まで、2年目は9月中旬から翌6月中旬まで、また最終年は、10月から翌6月までの年間スケジュールが組まれている。授業時間は、一週間につき平日の一晚（6時から10時、だいたい水曜日か木曜日に授業科目が開講されているようである）と1ヶ月につき1～3土曜日（午前9時から午後1時と午後1時から5時）というスケジュールになっている。学生はこのスケジュールに則って、1、2学年の間に、一連の18のコースをこなし、3年目には、プロジェクト課題を完成することになる。

（2）理念と方針

さて、このプログラムでは、教育者としてのリーダーシップの涵養・開発が目指されているわけだが、そのリーダーシップの理念と教育方針は明確であり、国内でも最先端を行くリーダーシップ教育の研究、リーダーシップの原則、現場教育を改良するスキル修得をもって、最終的には初中等教育と大学教育のリンケージを図り、そこで学ぶ生徒・学生の教育機能の向上を目指すことを目的としている。

教授陣はGSE&ISの教員の一部に加え、現場の初中等・高等教育レベルの関係者が、学生の教育指導に当たっており、その教育理念と方針は、5つのテーマに分類されている。すなわち、1.リーダーシップの涵養、2.経済的・社会的・政治的・文化的・技術的環境の改革、3.大衆・社会構造・システム・目的といった組織的なデザインと再デザイン化、4.学生の能力開発、5.持続的なアクションリサーチの改善、の5つのテーマである。これらは互いにリンクしあい、以下に列挙するようなこのプログラムを貫徹する8つのキーコンセプトへと繋がっている。

1. リーダーシップの特性は生まれながらの贈り物でないが、ほとんどの人々で開発することができるものである。
2. リーダーシップには重要な倫理的な側面がある。教員ならびに学生は自身の行動においてそれぞれ責任をもつべきである。
3. 自ら変化し続けることの出来るリーダーは、今日のようなますます複雑な社会においては重大な意味を持っている。
4. 教育の領域におけるリーダーは、かれら自身が所属する教育機関を超越して、学生の能力開発を改良するにはどのような方法が最善であるかを見通す必要がある。
5. リーダーは、自身が在住する行政区における学校・大学の改善に必要な手段とノウハウを持たなくてはならない。
6. 教育の領域におけるリーダーは完璧な情報を持たなくとも、十分なアクションリサーチを行い、さらにそれをフィードバックと修正するだけの手法を知らなくてはならない。
7. 厳密な観察によってのみ、新しい重要な知識が得られる。
8. 理論とそれらの応用は、教授陣と学生との間の効果的な共同作業を通したときに、最も効果的に発現する。

また後述するように、グループによるプロジェクト解決型の教育方法と、コーホートにおける個人それぞれに課せられた課題は、リーダーシップのスキルと個人的な能力 (competencies) とともに、コミュニケーションのスキルも向上させると考えられている。小人数のグループによる共同作業 (collaboration) は、このプログラムには欠かせないコースワークとなっている。つまり、学生はそれぞれの目的・ビジョンを他のチームメイトとともに組み立て、またそれを他者に伝えることによって、自らが成長することの出来るリーダーとなる方法を学ぶのであり、また他のチームメイトのサポートと協力を通じ、戦略・計画・目標などを設定してグループごとに持ちうるリソースを活用し、交渉能力やグループ内での異なる意見対立の調整能力を磨いていくのである。

(3) 教育方法と内容

前節でも述べたように、このプログラムでは、毎年入学する20数名の学生をひとつのコーホートという括りでまとめて競争的な集団とし、各構成員の相互の教育機能を高めている。このコーホート内で、さらに学生は小さいグループごとに分かれ、さまざまなプロジェクトと一緒に取り組むことを要求される。後述するように、このプログラムではケーススタディによるコースワークが重視されているため、それぞれのグループ内ないしグループ同士による問題解決型の教育方法が、学生相互の信頼感とネットワークの構築に大きく寄与していることは間違いがない。加えて、メンバーの多様な教育ならびに職業的な背景は、学習の新たな方法を生み出すことにつながっている。また、学生はそれぞれのコミュニケーション能力 (書く、話す、聴く) や、技術的なスキル、グループ内での協調性などの能力を涵養することが出来るのである。

ちなみに、こうしたコーホート制度、または小人数のグループ方式は、卒業後も貴重な教育界でのネットワークへと繋がっているようである。このプログラムの卒業生はELPAA (Educational Leadership Program Alumni Association) に属し、カルフォルニア州内で50近い学区の中で監督者、学校長、教師、その他主要な学校の職員など重要な地位に就いているものが多く、また高等教育レベルでも、コミュニティ・カレッジや4年制大学の学長・副学長などの行政職やコンサルティング分野で活動しているものも少なくないため、初中等レベルと高等教育とのリンケージにおいて重要なコネクションを構成しているようである。

また、このプログラムのコースワークの特徴となっているのは、ケーススタディ・メソッドと内省的作文 (Reflective Writing) である。まず、ケーススタディ・メソッドとは問題解決型の経験教育であると言えるが、この方法はハーバード大学のビジネススクール (School of Business) で1920年代から開発され、今日では全米の高等教育機関に普及している教育方法であることはよく知られた事実であるが、このプログラムでのケーススタディの目的は、ディスカッションとディベートの枠組み (フレームワーク) を開発・向上させることであると明記されている。あるケースについてのディスカッションは学生それぞれの個人的な経験や知識の壁を越えた複眼的な思考法と幅広い視点を提供し、学生らがデータを収集し、また解決策を見出すことを手助けするものと考えられている。また、効率的で効果的なディスカッションとは、学生全員を巻き込むような活発な討議となることであるとされている。その際に、教員はディスカッションの方向性を示唆することはあっても、それをコントロールすることはあってはならないと考えられている。

次に、内省的作文 (Reflective Writing) という方法は、個人的な側面と専門職業的な側面両面で、学生自らがそれぞれの内面的な感情や思索を文章の形で表出することによって、それを相対的に再考することが出来るようになり、より明確なイメージを構築することを手助けするというものである。その際の自省的な思索の指針として、このプログラムでは、1. 学校をたとえどどのようなメタファーとなるか?、2. 教育における自分の情熱とはどのようなものか?、3. 今日教育のリーダーたちが直面する最大のイシューとはどのようなものかと考えるか?、4. 自分の教育者としての最大のイシューと課題は何か?、5. このプログラムに入学したことをどう考えているか?、6. このプログラムで同期の学生と同じ希望や恐れを共有することをどう考えているか?、7. 自分の関心事についてどう説明するか?、8. 「良い」教育者とはどういうものか、またそうでないものと分け隔てているものはどのような資質であるか?、などという問いが用意されている。

(4) 学位取得までのステップ

このプログラムへの入学の基準・要件は、GSE&ISとは別に設定されており、より実践的なものが要求されているようである。具体的には、1. リーダーシップを発揮した経験があるか、またはその可能性が証明できること、2. 学士レベルでのGPAが3.0以上であり、望ましくは大学院レベルでの学位を有していること、3. GREのスコアが500ポイント以上であること、4.

職場の上司と同僚の強い推薦があること、5. 分析的な論述及び会話のスキルがあること、5. 同僚と協力的に仕事を遂行する能力があること、6. 初中等あるいは高等教育レベル、または教育関連分野での職業経験があること、などとなっている。また、実際に学位獲得までには、強い問題関心と達成能力が必要とのことで、それが欠如している場合には、学生当人により結果をもたらさないとのことで、それ故に入学以前の職業履歴に、教育現場での経験が強く求められているわけである。なお、このプログラムへの入学には、修士号の取得は要件とはされていない。また、コーホートごとの学生の教育・職業履歴のバランスをとるために、初中等教育の分野、高等教育レベルの分野、教育関連分野、それぞれに偏ることなく平均して入学者を選抜しており、競争率は3倍程度とのことである。

UCLAでは1年がクォーター制に分かれており、入学願書を前年度の2月までに提出し、入学が許可されると、1年目は9月から始まる秋学期、翌年1月からの冬学期、4月からの春学期の3クォーターを通じて、学生はコースワークに取り組むこととなる。この1学年の春学期の最後に、2年次進級のスクリーニング試験を受け、さらに翌年の2年の春学期最後に、筆記による学位取得候補者として資格試験（Written Qualifying Examination）を受ける必要がある。さらに、3年時進級を前にした夏休みから3年次の秋学期の間に口頭による予備試験（Preliminary Oral Examination）をクリアし、3年次最後の春から秋にかけて、自らが手がけたプロジェクト課題（Culminating Project: Practice-Based Dissertation Project）の提出と最終的な口頭試験（Final Oral Examination）が待ちかまえている。

1学年最後の進級試験は、5つから6つにわたるパートに分かれており、1. 自宅学習の成果、2. このプログラムでこれまで仕上げた学修のポートフォリオ、3. リーダーシップの適正審査、4. 教員との面接、5. グループ単位での学修の審査、6. 学修に関連した成果の提出（適宜）、である。学生は2～3人の教員と1時間から1時間半の面接を受け、1年間のプログラムでの学習の成果と進展について話し合い、また学生は今後に取り組むべきプロジェクト課題のアイデアについて議論することとなる。

2年次最後の学位資格試験では、筆記によって、学生らが教育問題に関する中核的な知識とそれを分析する能力が十分であるかが問われることとなるが、これは教育分野に携わる専門職に必要な資質と考えられているため、試験は合否によって判定され、不合格となった学生は再度受験する機会が与えられる。またこの試験は、自宅に持ち帰って行う記述試験の形を取っており、だいたい学生には3日程度の期間が与えられている。この資格試験に合格すると、各学生にはそれぞれ4人の教員からなる学位審査委員会が設けられるが、その教員はUCLAのテニユアにある準教授以上の教員（名誉教授も可）の中から学生ら自身が選ぶことが出来る。ただし、委員会の主査は、GSE&ISの教員とする必要がある。

3年次終わりの予備口頭試験では、学位審査委員会の主査によって、学生のプロジェクト課題の進捗状況と審査委員会による最終試験に臨む準備が整っているかが問われることとなる。この予備試験は、最終試験の数週間前に行われる。これにパスした後、学位審査料として50ドルを納め、最終試験に臨むこととなる。

さて、このプログラム終了の最終段階として、最終試験の他に、学生は課題プロジェクトの成果を提出する必要があるわけだが、これは3年間のプログラムの修了研究・論文に当たるものであり、教育職の専門的知識と実践の具体的な総決算とも言えるべきものである。したがって、その成果は、即、現場への現実的な貢献に繋がることが期待されており、またその点の有無が評価・審査のポイントともなっているとのことである。

最終試験は2時間ほどで、学位審査委員会によって、学生の課題プロジェクトの成果について口頭で行われる。これにパスした後、学生は課題プロジェクトを、博士論文の形にプリントならびにファイリングして最終稿を2部提出、晴れてプログラムを卒業、博士号取得となる。

4. おわりに

以上、UCLAの教育系プロフェッショナルスクールGSE&ISにおける「教育リーダーシッププログラム」(Educational Leadership Program)について、そのEd. D.の性格とプログラムの特徴・教育理念・方法などについて概要を紹介してきた。まだ開設されてから10年程度ではあり、卒業生も100名には満たないため、プログラムの正否について論じることは難しいだろうが、少なくともカルフォルニア州の教育界において、このプログラム卒業生を中心として確固としたネットワークが構築されつつあるようである。「横」のレベルに加え、入学時の選抜のポリシーにも表わされていたように、中等教育と高等教育それぞれのバックグラウンドを持つ学生をバランスよく入学させ、一つのコーホートとして集団教育するという方法は、卒業後も「縦」のネットワークを形成することに繋がっており、その意味で中等教育と高等教育とのアーティキュレーションの場面でも、大きな影響力を及ぼす可能性を有していると言えるだろう。教育内容や理念も明確ではあるが、それ以上に、コーホート制による小人数教育という教育法が、学生同士の集団的な団結力と親近性を涵養する部分が極めて大きいことが示唆されている。

また、先にも触れたように、この職業学位プログラムは、GSE&ISにとってはある意味、教育専門職養成というプロフェッショナルスクールが持つべき本来的な機能と役割を担うべく開設されたものであると言える。90年代前半の大学内外を取り巻く経済不況・予算削減という政策的・政治的な背景があるにしても、教育系プロフェッショナルスクールが、今後どのような方向を目指すのかが暗示されており、またこのプログラムがその試金石となっているとも言えよう。ただ逆に言えば、教育系のプロフェッショナルスクールにとっては、中等教員、研究者、教育専門職の三者を同時に養成するという機能と役割を時代の要請に適用させ、そのバランスの均衡を図ることが、今後サバイバルしていく重要な要となることは間違いがない。その意味で、このEd. D.プログラムが今後、大学ならびにGSE&ISの中でどのような展開をみせるのか、注目される場所である。

[注]

本稿の記述は、UCLA GSE&IS, *Handbook of Graduate Student Policies and Procedures*, GSE&IS, Educational Leadership Program, *Student & Alumni Handbook 2000-2001*, ならびにGSE&ISのホームページ (<http://www.gseis.ucla.edu>) に多くを負っている。また、実際の授業の参与観察、教員個人へのインタビューなどによる情報も含んでいるが、本文にはとくに表記していない。

[ABSTRACT]

Professional Degree Programs in the U.S.:
Ed.D. program of the professional school of education

HASHIMOTO Koichi*

There are so many professional degrees at graduate level in the U.S. The Ed.D. (Doctor of Education) is one of them in the field of education conferred by professional school. I introduce the policies, procedures to the degree and history of the Ed.D. program in the Graduate School of Education and Information Studies (GSE&IS) of UCLA in this paper.

Since 1939, GSE&IS has offered advanced degrees such as Ph.D., Ed.D., M.A., and M.Ed.. These degree programs pursue careers as teachers, school administrators, researchers, college faculty and college administrators. The Ed.D. is the highest professional degree offered by the Educational Leadership Program (ELP) of GSE&IS, which was developed in 1993 in response to a public mandate for strong leadership to guide the nation's schools and colleges. In contrast to the Ph.D. degree in research focused on building or testing theory, the Ed.D. emphasizes action research to improve the practice of education.

ELP students have to be engaged in the 3-years courses work in groups on projects that may involve problem-based learning, case studies and reflective writing. All students must complete a culminating project to get the degree. The ELP has a profound impact on their professional carrier and contributes to their ability to both obtain and succeed in their current position by getting the Ed.D.

* Associate Professor, Faculty of Assessment and Research for Degrees, National Institution for Academic Degrees